

相貌ステレオタイプの顔の記憶への影響

西 村 聡 生

The Effect of Facial Stereotypes on Facial Memory

Akio NISHIMURA

要 旨

本研究では、性格に関する相貌ステレオタイプと顔の記憶について検討した。研究1では、性格特性からどのような相貌特徴が連想されるか調査した。優しい人は目がたれ下がっている、口角が上がっているといった特徴が、厳しい人は眉が釣り上がっている、口が真一文字だったり口角が下がっているといった特徴が連想されやすく、対照的な相貌ステレオタイプがみられた。研究2ではこれらの性格特性と相貌特徴に着目し、顔写真とともに優しいあるいは厳しい人物であるという紹介文を呈示した。その後、変更を加えた顔写真を呈示し、画像編集ソフトで目、眉、口角を編集して元の顔を再現するよう求めた。優しい人の方が厳しい人よりも、目と眉は垂れた方向に、口角はより上がって再現され、相貌ステレオタイプに基づく記憶の変容がみられた。一方、ステレオタイプとは関連しない目の大きさや眉の太さでは違いはみられなかった。

キーワード：相貌ステレオタイプ、記憶の変容、性格と顔

は じ め に

われわれは初対面の人物の性格を推測する手がかりとして、その人物の顔を利用している。例えば、たれ目の人物は優しくなど、ある相貌特徴を有する人はこのような性格特性を有していると結びつけるような相貌ステレオタイプを持っていると考えられ、その印象は投票など様々な行動にも影響を及ぼしていると示唆されている（トドロフ、2019）。

相貌ステレオタイプは、顔の記憶にも影響するかもしれない。記憶は、記憶対象へのラベルづけ（Carmichael, Hogan, & Walter, 1932）や事後情報（Loftus, Miller, & Burns, 1978）等、様々な要因によって影響される。また、よく知らない顔の表象はあまり安定していないことが示唆されている（トドロフ、2019）。研究1では、性格に関してどのような相貌ステレオタイプがあるのか質問紙法で検討する。研究2では、研究1で得られた相貌ステレオタイプに合致するような顔の記憶の変容がみられるか実験的に検討する。

研究1：相貌ステレオタイプの調査

研究1では、性格特性と相貌特徴の間に一般的にみられる結びつきを調査するため、18の性格特性から連想される相貌特徴について、顔のパーツとその特徴の記述およびその連想は自然なものかへの回答を求めた。

方 法

女子大学生35名が参加した。集団で質問紙調査を実施した。質問紙には、対になる18の性格をあらわす形容詞（優しい、厳しい、素直な、強情な、明るい、暗い、真面目な、不真面目な、外向的な、内向的な、親しみやすい、親しみにくい、頼もしい、頼りない、暖かい、冷たい、きちんとした、だらしない）を記し、それぞれの右側に幅の狭い括弧と広い括弧を「が」を挟んで配置し、右端にはチェック用の四角を配置した。参加者は、それぞれの性格特性についてどのような顔の特徴が思いつくか、前の括弧内に顔のパーツ名を、後の括弧内にそのパーツがどうであるかを記述し、その特徴が容易に思いついた場合には右側の四角にチェックを付けた。また、18の性格特性以外に思いつくものがあれば、その性格特性も含めて同様の形式で回答した。追加回答用の欄は18番目の性格特性の下に、左端に性格特性名を記入する欄を二重カギ括弧で配置し、右端のチェック欄は削除して、6項目分追加した。

結 果 と 考 察

連想された特徴がよくあらわれるパーツ（および特徴）は順に、目（全回答の43%；目への言及のうち角度25%）、口（30%；口角65%）、眉（18%；角度39%）だった。特定の性格特性から連想されるパーツと特徴の組み合わせでは、「優しい」からの連想の54%が「目」が「たれ下がっている」であり、最も多かった。対になる特性である「厳しい」からの連想で最多だったのは「眉」が「つり上がっている」であり29%だった。性格特性対ごとの連想率はこの対が最も高く、また連想が容易だとチェックされた率は「優しい」が84%、「厳しい」が70%でそれぞれ1番目と2番目に高かった。「優しい」から連想される相貌特徴では他に「口角が上がっている」が、「厳しい」では他に「眉間にしわが寄っている」「口が真一文字」「口角が下がっている」が、回答の10%以上でみられた。加えて「厳しい」では、「目がつり上がっている」と「目が鋭い」も合わせると10%を超えた。

優しい人はたれ目で口角が上がっているという、また厳しい人は目と眉がつり上がり眉間にしわが寄り、口は真一文字あるいは口角が下がっているという、性格と相貌の結びつきに関するステレオタイプの存在が示唆された。目の角度と口角に関しては、優しいと厳しいで逆方向の相貌特徴と関連していた。したがって、研究2では、性格特徴として「優しい」と「厳しい」を取り上げ、目・眉と口角の記憶について実験的に検討する。

研究2：相貌ステレオタイプに基づく顔の記憶の変容の実験的検討

研究1では、対になる優しいと厳しいという性格特性について、目・眉・口元に関して比較的

一般的で対照的な相貌ステレオタイプがみられた。そこで研究2では、このステレオタイプに合致するような顔の記憶の変容が生じるか実験的に検討する。最初に顔写真とともに優しいあるいは厳しい人物であるという紹介文を呈示し、その人物の印象評定を求めた。妨害課題を挟んで、変更を加えた顔写真を呈示し画像編集ソフトで目、眉、口角を編集して元の顔を再現するように求めた。

方 法

参加者

研究1に参加していない18歳から22歳の女子大学生20名（平均年齢20.1歳）が、性格特性2条件（優しい、厳しい）に10名ずつ参加した。

刺激

顔写真には、参加者とは面識のない、正面を向いた若い女性の首から生え際の少し上までのカラー写真を用いた。髪の毛は写真の下端よりも下まで続いていた。また、顔の輪郭および左右の眉毛と耳は髪の毛で隠されてはいなかった。もとの画像からほうれい線を除去し、口角を真っ直ぐに変更した（オリジナル画像）。オリジナル画像は、縦13cm、横13cmで質問紙にカラー印刷した。

顔の再現時に最初に呈示する顔画像は、オリジナル画像とは異なっており再現のために修正が必要だと参加者に確実に判断させるため、オリジナル画像の目を小さく、角度を下げ、口角を上げ、眉を細く水平に改変した。

手続き

実験は、通常照明下で個別に行った。各セッションは顔の呈示と印象操作、鏡文字書字、顔の再現の3段階から構成され、所要時間は15分程度だった。

最初に、人の印象についての調査であると説明して、特定の印象づけのため2ページの質問紙に回答する課題を行った。最初のページには、下の人物の紹介文を読み性格についてどのような印象を受けたか回答するよう指示があり、顔写真の下にその人物の紹介文が10行で書かれており、加えて実験者は顔写真を見ることと文章を読むことを口頭でも教示した。紹介文は2種類あり、優しい条件では、ボランティアに積極的に参加し介護福祉士になることが夢だという、人のために何かをすることが好きな人物として、厳しい条件では、後輩に対し高圧的な態度をとり、自分にも他人にも厳しい人物として、それぞれ紹介された。2ページ目では、人物に対して、優しい、厳しいの2項目に加えて、真面目な、不真面目な、冷たい、暖かい、頼りない、頼もしい、明るい、暗い、のダミー項目8項目の性格特性それぞれについて、どの程度そのような印象を受けたかを、5件法（1. 全く受けない、2. あまり受けない、3. どちらともいえない、4. やや受けた、5. かなり受けた）で回答を求めた。

続いて、ひらがな、カタカナ50音を鏡文字で順に記入する課題を3分間実施した。記入する用紙には枠を印刷し、あらかじめ1文字目（あ、ア）は例として鏡文字が記入してあった。

最後に、顔の再現課題を、ノートPC（Panasonic CF-SX4 Let's note）上で、Adobe Photoshop CC 2018（Adobe）のゆがみフィルターを用いて行った。目の角度と大きさ、口角、眉毛のみ操作するよう教示し、操作方法は実験者が口頭で説明した。左側に顔画像が呈示され、目の角度と大きさ、口角は画像右側の対応するデジタルスライド目盛を左右に動かすと連動して画像が変化

し、同時に数値も0から変化した。数値は-100（左端）から+100（右端）の範囲で、大きいほど目はつり上がり、大きく、口角は上がった。操作に伴い、左右のパーツは連動して変化した。眉毛の操作には、画像をクリック、ドラッグすることで少しずつ編集できる前方ワープツールと、少しずつ元に戻す再構築ツールを使用した。制限時間は設けず、再現が終了したと参加者が判断したら終了とし、その後実験の真の目的を説明した。

結 果

操作チェックのため、最初の印象操作のための文章中で示唆された性格（優しい、厳しい）間での、優しさおよび厳しさの印象評定値についてt検定を行ったところ、両項目とも有意だった（ $p < .001$ ）。優しさは優しい条件（4.8）の方が厳しい条件（1.9）よりも高く評定され、厳しさは厳しい条件（5.0）の方が優しい条件（2.1）よりも高く評定されていた。

目の角度、大きさ、口角については、ゆがみフィルターにおけるデジタルスライド目盛操作に伴う数値を変化量として、優しい条件と厳しい条件の間で対応のないt検定を行った。目の角度（図1左）は、優しい条件（+25.5）よりも厳しい条件（+75.7）の方が有意に、相対的につり上がっているように再現された（ $t(18) = 3.96, p = .001, d = 1.69$ ）。目の大きさ（図1中央）は、優しい条件（+33.9）と厳しい条件（+30.8）の間で有意差はみられなかった（ $t(18) = 0.29, p = .777, d = 0.12$ ）。口角（図1右）は、優しい条件（+12.7）の方が厳しい条件（-35.5）よりも有意に、相対的に上がっているように再現された（ $t(18) = 2.60, p = .018, d = 1.12$ ）。

眉に関しては目や口角のような数値データが得られないことから、全再現画像の眉部分のみを切り取り、それを21歳から23歳の女子大学生34名（平均年齢21.7歳）が、太さ（細い—太い）と角度（たれ下がっている—つり上がっている）について7件法で評定した。評定結果について目や口角と同様のt検定を行ったところ、眉の太さの評定（図2左）は、優しい条件（5.1）と厳し

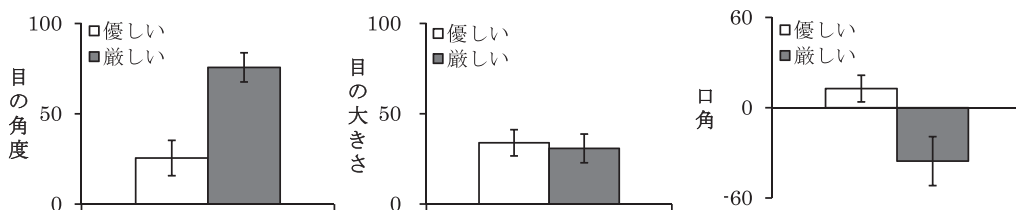


図1. 優しい条件と厳しい条件における再現された顔の目の角度（左）、目の大きさ（中央）、口角（右）の平均変化量。エラーバーは標準誤差。

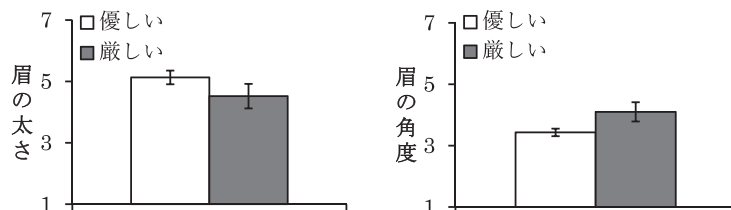


図2. 眉の太さ（左）と角度（右）の平均評定値。エラーバーは標準誤差。

い条件（4.5）の間で有意差はみられなかった（ $t(18) = 1.33, p = .200, d = 0.57$ ）。眉の角度（図2右）は、優しい条件（3.4）よりも厳しい条件（4.1）の方がつり上がっていると評定される傾向がみられた（ $t(18) = 1.99, p = .062, d = 0.85$ ）。

同じ顔であっても、優しい印象の人物は、厳しい印象の人物に比べてたれ目たれ眉で、口角が上がって再現された。これは、研究1で得られた相貌ステレオタイプと合致する。一方、優しいあるいは厳しい性格の人物から連想される相貌特徴としてほとんどあがらなかった目の大きさや眉の太さでは、性格の印象による違いはみられなかった。

総 合 考 察

本研究では、性格特性に関する相貌ステレオタイプについて検討した。研究1では、優しさと厳しさに関して対照的な相貌ステレオタイプが目、眉、口元あたりに比較的強くみられることが示唆された：優しい人に関してはたれ目、上がった口角という相貌ステレオタイプが、厳しい人に関してはつり眉（目）、真一文字あるいはへの字口、眉間に皺といった相貌ステレオタイプがみられた。

研究2では、5つの相貌特徴のうち、前述の相貌ステレオタイプに関わる特徴である目と眉の角度および口角でのみ選択的に、ステレオタイプに合致するような顔の記憶の変容がみられた。本研究は、性格の印象によって相貌ステレオタイプに基づき顔の記憶が変容することを示した。相貌ステレオタイプに基づく記憶の変容は、表情に関連する可変特徴（口角）のみならず、比較的不変と考えられる形態特徴（目の角度）でもみられたことから、幅広く生起することが示唆される。

謝 辞

著者は、本研究の一部を著者の指導による卒業研究として実施した中山慎希さん（2019年安田女子大学心理学部卒業）に感謝します。

引 用 文 献

- Carmichael, L., Hogan, H. P., & Walter, A. A. (1932). An experimental study of the effect of language on the reproduction of visually perceived form. *Journal of Experimental Psychology*, 15, 73-86.
- Loftus, E. F., Miller, D. G., & Burns, H. J. (1978). Semantic integration of verbal information into a visual memory. *Journal of Experimental Psychology: Human Learning and Memory*, 4, 19-31.
- トドロフA. 中里京子（訳）作田由衣子（監修）（2019）. 第一印象の科学 みすず書房（Todorov, A. (2017). *Face Value*. Princeton University Press.）

